

One hour writing

福籠

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワンライ。

お題に沿って一時間で書く練習。

練習だって言い訳はしたくないので、批評どんどんください。全部読みます。ただ、それに今後対応するとは限りません。

目次

H a p p y N e w Y e a r | 1

黒の水面と砂糖菓子 | 5

虚 | 9

Happy New Year

「新年あけましておめでとうございます。待たせちゃった？」
そう言って待ち合わせ場所に現れたあやせ。

予定の時間よりは早く着いたつもりだったが、彼方が到着したのも
ほぼ同刻だっただろうか。

「こうやって過ぐすのも初めてだから…」

待っていないよ、と返しつつ、予定よりまだ早いことを本人に告げ
ると、少し恥ずかしそうに答えた。

新年というのもあつてか、着物を着付けてきている。

赤よりピンクに近いだろうか、そんな色をした梅の柄。

薄つすらとではあるが、化粧もしているだろうか。普段に比べて
表情に色つばさがある。

それに、普段であれば結っているか下ろしているかしている長いピ
ンクの髪も、後ろで団子を作って簪が挿してある。

「あんまりジロジロ見ないでもらえますか？」

今まで見たことのない姿に目を奪われていたら、釘を刺されてし
まった。

どれぐらいの時間見ていたのかもわからないが、少しばかり困惑し
た表情を見せていた。

「普段が似合わない…:とでも言いたそうですね？」

化粧で華やかになっているとはいえ、いつもの暗黒微笑。

誤魔化し気味に着物も似合うね、なんて言っではみたが、少々彼女
の逆鱗に触れてしまったようだ。

「そんなことより早く行きませんか？ 折角早く来たんですから」

まだ若干黒い笑みを浮かべてはいたが、本来の目的を促してくる。

今日は学園近くの神社への初詣。

あやせ自身は、去年まで学園の云々が忙しくて来れなかったそう
な。

彼女にとつては久しぶりのこともあつて、浮かれ気味である。

かといって自分もこうやって来るのは久々だったりするのだが、その話は置いておくことにする。

待ち合わせ場所は駅にしていたので、ここからさらに歩くことになる。

町の大通りを抜けて、かなり長い参道。

少し調べてみたが、かなり由緒正しい神社らしく、毎年人がごった返すらしい。

駅前の雰囲気だけではそうも感じないのだが。

来るのは初めてのことなので、スマホを片手にあやせと歩く。

特に複雑な道もなく参道の手前までたどり着いたが、前方には満員電車を想起させるような雑踏。

鳥居が見えるので参道だとはわかるが、ここまで人が多いと逸れてしまいそうなものである。

「どうするもなにも、初詣行くんでしょ?」

少しばかり怖気づいてしまった自分が、立ち止まってどうするか問いかけると、そんな返事。

彼女の中に戻る選択肢はないようだ。

「でもこれじゃはぐれそうだから…はい。」

そう言って右手を差し出してくる。

何か渡すのかと思っただちよつと考えていると、ややイラついたような表情。

「これぐらい分かりなさいよ…!」

そう言っただけで軽く小突くと左手を握ってくる。

ようやく、逸れない為に手をつなごうとしていたと気づいた。

怒りとも恥ずかしさもわからないが、少し赤面したあやせの顔を見て納得する。

「まったく…」

そう言いながらも強く手を握るあやせに、かわいらしさを覚える。

その手を握り返して、再び雑踏に向けて歩き始める。

いざ人混みに入ると、なんだかんだスムーズには進行できた。

少し歩いてみてわかったが、この参道は参拝客の往路だけらしい。

逆に歩いてくる人がいない分、自然と歩を進められるので、意外と見た目以上に逸れる心配はないのかもしれない。

どれくらい経っただろうか、参道も半分ぐらい進んだ頃になると、道の左右に屋台が見え始めた。

それに、その屋台からもいい香りが。

朝こそ寮で食べたので空腹感こそないが、不思議と屋台に目が行ってしまふ。

「少し小腹も空いたし、何か食べませんか？」

そんな自分の様子を見てか、あやせがそう提案してくる。断る理由もなかった。

これが食べたいというのもないようなので、手近だった屋台に立ち寄る。

「シャーピン？なんですかこれ？」

正直自分も何の屋台だか把握せずに近寄ったが、意外と客が並んでいた。

鉄板の上のものを見てもなんだかわからない。平らに広がった丸い何か、としか表現できない。

鉄板脇の材料を見るに、餃子みたいだが…？

スルスルと客が捌けていき、気が付けば自分が頼むタイミングに。気さくそうなおじいさんに2つ頼んでお代を渡すと、一つ分のお代を返される。

別嬪さん連れてんだ、サービスしとくよ、と。

あやせのほうを見ると、恥ずかしかったのか俯いている。

手早く紙に包まれた鉄板の上のものを渡されて、そのままあやせにも渡す。

何なのかもわからないまま口に運んだが…これは餃子？

口に合うか心配だったが、あやせは満足そうな表情。

「前に食べた七海ちゃんの餃子みたい。」

そんな感想。自分も同じような感想だった。七海の餃子、それがちよつと大きくなっただけ。

食べながらも、屋台に並んでいた間少し離していた手を再び取る

と、少しびびったりした表情でこちらを見上げてくる。

今度は笑顔だった。

何も会話はなくとも、手を繋いだまま歩くだけで幸せだった。

ようやく本殿前の大鳥居が見えてくる。

「どんなお願い事をするんですか？」

あやせがふとそんなことを聞いてくる。

さて、なんてお願いしようか。なんて誤魔化して、もう一度手を強く握る。

この幸せが続きますように、なんて本人には恥ずかしくて言えなかった。

黒の水面と砂糖菓子

私が卒業して、就職してから半年とちよつとが経った。

研究所ですれ違った友人から、暁君がここに就職することになったと聞いた。

最初こそ学力において不安があつたものの、こちらの仕事の休みに合わせながら足繁く通つてくれたおかげか、難なく決まつたようだ。

その話を聞いた時、意外と短かつたね、なんて茶化し気味に言つてはみたものの、彼が来てくれていなければもつと長く感じていただろう、とは内心想っている。

ただ、勿論彼とはそういう関係である以上は「勉強」だけで終わるわけもなく。

その度と一緒に住んでいる琴里には迷惑をかけてしまつたとも思っていた。

毎度機嫌を取るのにどれだけ苦勞したことか……というのは暁君には話していなかつたりもする。

ちよつとご機嫌斜めになりながらも、応援してる、なんて言つてくれたし。

今までの日々が少し懐かしく思えるような報せ。

そんな幸せを運んできた報せから数日経つたある日のお話。

今までと同じように暁君がやってきた日のこと。

この一年で完全にそういう癖がついてしまつたのか、就職が決まつてからも何をするわけでもなく彼はやってきていた。

学院の制服に、ちよつと不釣り合いな革のビジネスバッグ。

いつもならそこからノートと重そうな参考書が出てくるのだが、もう必要なくなつてしまつたからか、今ではただの置物。

それと今日は、アタシの見覚えのないお店の名前——Schwarze Kätzle——が入つた紙袋。

教材とともにああだこうだと解説のようなことをしつつか愛のな

い話ができただのだが、改めて何もなくなってしまうと切り出す話題がないことに気づかされてしまう。

テーブルを挟んで彼との間に重い沈黙が流れる。

珈琲、淹れようか。

数秒だったか、数分だったか。

終に耐え切れず口を開いたのは彼のほうだった。

そう言うのと、困っていたことを示すかのような苦笑いと共に立ち上がる。

それならアタシが――

そう言つて一緒に立ち上がろうとしたアタシの肩を、彼の両手がそつと抑えた。

今日は俺がやるから、待ってて。

そう言つて紙袋を持つてキッチンへと入つてしまった。

今度は自分だけ、テーブルの前で一人きり。

キッチンから聞こえるコーヒーマルの挽く音、カップとソーサーのぶつかる音。

さっきのような沈黙でこそないが、会話はやはりない。

カウンター越しに見える彼に向つて、少しばかり不満げな顔を見せてみたものの、目が合つても苦笑いを返されるだけ。

お湯の沸いた音と共に彼の目線が下に落ちる。

蒸らした豆から漂う香りがこちらまで香る。香りからするに自分がいつも淹れているものとは豆からして違うようだ。

どうしてそんなところまで拘っているのだろうか、なんて考えながら彼の様子を見ていると、少しして満足そうな顔をこちらに見せる。

その顔を崩すことなく珈琲とお菓子をテーブルに並べていく。

こういう顔も好きだな、なんてちよつと思つたけど言わないでおく。

彼がテーブルに戻つて、飲むように促してくる。

いただきます…と、一口珈琲を含む。

香りからすでにいつものものとは違うが、水っぽくなく、苦みも酸味も程よくて、飲みやすい。

味を確かめるように、さらにもう一口飲んでしまう。
こんなに美味しい珈琲を淹れるなんて、と少し驚いてしまう。
カップから口を離して一息つくくと、今度はお菓子を勧められる。
カラメル色のナッツが敷き詰められた四角い砂糖菓子^{コンフィズリー}。
フォークを入れると、見た目に反して柔らかく沈む。
ナッツの程よい食感が心地よく、甘すぎないお菓子。
この珈琲と一緒に出すのも頷ける味。
それにしてもなんでこんなに完璧な食べ合わせを見つけれられたの
だろう？

そんな率直な疑問。

学園から数駅のところ^に美味しい喫茶店があるから行ってみた。
淹れ方まで店員さんに教わった。

少し恥ずかしそうに彼は言う。

さらにこう続けた。

先輩にいつつも淹れてもらってばかりだと申し訳ないから、と。
変なところで義理堅い彼についてクスツとしてしまう。

そんなことを気にしていたなんて思いもよらなかった。

付き合ってるのに、そんなこと気にしてたの？

そう言つて茶化して、笑いながら彼に目を合わせると、少し迷った
ような顔をしていた。

その後は、依然と同じように他愛のない会話をしながら時間が過ぎ
ていく。

学園での話、義妹さんの話。

他愛のない話題のはずなのに、彼はちよつと無理をしているような
気がした。

なんでだろう？ そう思いながらも口にすることは終ぞなかった。

そろそろ夜も深くなろうかという頃。

再び淹れてもらった珈琲とお菓子を頂いていると、彼が鞆に手を伸
ばして何かを探しはじめ。

まだ、何かあったのだろうか？

そう思っていると、やけに真面目な顔になった彼がこちらを向いた。

もう、お付き合いはやめにしませんか。

彼が手を伸ばしてくる。

手の中には紺色のリングケースと2つの銀色の指輪。

この日のために今まで頑張ってこれたんです、この日のために…

彼の顔は早くも泣きそうだった。

ああ、そういうことか。

付き合ってるのに、なんて言ったもんだから

アタシが、その約束を忘れてるんじゃないかって不安だったのか。

心の中で可愛らしいなあなんて思いながら、その手の中の指輪を取る。

そのまま左手を彼のほうに伸ばしながら

——忘れてなんかいないよ

そう告げた。

彼は泣きながらも、私の薬指にそれを嵌める。

そしたらすぐに、誤魔化すように珈琲を飲み干した。

私も恥ずかしくなってお菓子に口をつけた。

さつきより少し甘くなった気がする。

ボクが真咲と付き合い始めてから、どれだけの日々が過ぎただろうか。

季節は巡った気がするからもう一年は経っただろうか。

周りに助けられてなんとか付き合いはじめたボク等だったが、なんだかんだそれぐらいは経っただと思うと、少し感慨深いものがある。

最近とは言えば、いつもの店——大仰な表現をしたが牙と爪の獣亭である——の常連からも認知されたようで、たまに夕食で階下に降りたときには面倒な絡まれ方をする事も増えた。

特に隠さなくてはならない秘匿事項があるわけではない、とは言ったものの口外厳禁ではあるが、なんだかんだ酔っ払いとは言えどそこそこに長く住まっていたことからか、その辺の事情は理解してくれているようではある。

個人的に愚痴を吐くとすれば、性事情ばかりは根掘り葉掘り聞いくるのを勘弁してほしい次第であった。

学園でも下手な事をしなければ問題もなく、“あくまで”教師と生徒の関係として表向きは過ごせている。

女の勘と言うものは怖いもので、時折バレているのではなからうか、と思うような核心を突かれて凶星になることもあったりする。

やはりこの関係は大変なものだ。つくづくそう思わされる。

そんな日常を隠れ蓑に過ごしていたボクに、“災い”とも言うべき出来事が起こったのは今朝のことである。

X月XX日の明け方の事であった。

普段の起床時間よりは早い朝X時だったと思う。

特に休日というわけでもない平日である。

急に影が差した気がして目を開けると、眼前に真咲の顔があった。

横で寝ていたならまだ幸せだっただろう、その時のボクは生憎“仰向け”。

要するに、真咲に覆い被ざられている状況である。

付き合い始めた頃にもこんな事があつた気がする、そう思いながらもボクは眼前の真咲に声をかけた。

「ほら、真咲。ここはキミの部屋じゃないぞ、起きて」

返事は返つてこなかった。

寝ているのだろうか、そう思った矢先に上から声が降ってくる。

「あ、センセ起きたんだあ」

ただその一言だけだった。

「ほら、起きて自分の部屋に戻ってくれ。」

寝起きなのもあるだろうが、少し語気が強かつたような気がする。

しかしながら彼女は退こうとしなかった。

それどころか、あろうことかボクの腕を掴んで押さえつけてくるではないか。

「真咲、寝ぼけてるのか？」

「寝ぼけてなんかないよ？ センセをこうしたいって思ったの。」

男としては冥利に尽きるシチュエーションなのかもしれないが、今日は平日だ。

朝からそんなことをしているわけにはいかないのだ、そうボクの理性がストップをかける。

「別に今日じゃなくなつていいじゃないか、休日なら…」

言い終わるより先に真咲が口を開く。

「今日じゃなきややなの。センセはいつもそうやって逃げるから今日こそ捕まえたの。」

脳裏に過ぎつたのは彼女との“約束”。

彼女が卒業するまでは、“生”はしないという事にしたのだ。

何かの手違いで在学中に妊娠…なんて事になればただ事では済まない。それは彼女も理解した上で同意してくれていた。

そのはずだった。

熱っぽい吐息が頬に掛かる。

発情している……？とも思ったがそういうわけでもなさそうだ。

考えるや否や、唇を奪われた。

「ん……ちゅ……れる……んっ……」

そして彼女と目が合う。

虚ろな濃紺の瞳の奥まで、覗けるような気がした。

深く深く吸い込まれそうな瞳、その奥に映り込むボクの顔はどんな顔だっただろうか。

「ねえセンチセ、しよっ？」

「っ……！」

明確な彼女の意志。

それでもまだ僕の理性は“止まれ”と警鐘を鳴らしていた。

「約束したじゃないかっ……」

そう言うのが精一杯だった。

彼女を止めるにはそれで十分、そう考えた自分がいたのも確かだった。

「やだよ。センチセはワタシのこと嫌いなの？」

「そういうことじゃっ……！」

「じゃあどうして？」

そう言っつて真咲はこれ見よがしに身じろぎする。

今更気づいたが、真咲はいつものようにシャツ一枚、しかも上のボタンが外れている。

眼下に見るは大きく実った二つのそれ。

分かっつていてやってやっているのだろう、身じろぎする度に揺れるそれを嫌でも視界に入れなくてはならない。

「ねえセンチセ、これでもダメなの？」

艶っぽい吐息と共に彼女はそう囁く。

理性が溶かされる、とはこういうことなのかと身を以て理解する。

眼前の彼女は、意図してそうしている。それだけはまだ頭が認識していた。

「そしたら……こうしちゃおっか」

何かを思い付いたように彼女は呟く。

それと同時に、押さええられていた腕に力が籠り、脚にも体重がかか

完全に身動きが取れない。

ちらりと眼下を見ると、完全に馬乗りになった真咲の姿が見えた。「こうすれば動けないでしょ？センセはこのまま我慢してればいいんだよ？」

そう言いながら、キュツと腰を蠢かせてくる。

蠱惑的な彼女の姿に、理性というものが崩されていく。

「えへへ…辛いでしょセンセ。いつまで我慢できるかなあ？」

ふうつと耳に吐息を掛けられ、全身にゾクツと感覚が駆け巡る。

「センセが抱いてくれるまで……このままずっとこうしててあげる。」それからというものの、彼女はキス以外で直接触れてこなくなつた。

あくまでも、こちらが降伏するまでこのままにいるつもりらしい。どれくらい経つただろうか。

数分かもしれない、数時間かもしれない。ボク的时间感覚は既に壊れていた。

「抱いてくれれば楽になれるんだよ？どうしてセンセはそこまで我慢するの？」

「約束……だろっ……」

「約束したのはワタシだよ？ワタシがいいよって言ってるんだよ？」

「だから………シよ？」

耳元に熱い吐息がかかる。

理性の限界だった。

「もう…許してくれっ……」

「許してなんかあげないよ。」

胸を押しつけられる。

完全に理性も壊れた。

押さえられていた腕に力を込めて目の前の小悪魔を抱こうとする。

「ふふ……やっとその気になってくれたんだ」

ふつと腕から重さがなくなり、そのまましなだれかかってくる。

「でも…もう時間切れ。センセったらホント我慢強いんだもん……」

掠れるような声でそう囁いたかと思うと、身体に重さがさらにかか

る。

「すう………」

寝息が聞こえる。

ボクの上に横たわる彼女の身体をそつと抱きしめた。

この出来事は当分忘れることはできなさそうだ。